昼の月（2024.4-2025.3）

大西孝志

ゆく春の灯り煌々海ほたる
捨てし句を未練と思ふ春の暮
不揃ひの二個が寄りそふ草の餅
バスで行くうどん屋巡り額の花
六月の風はブルーや紫雲木
せせらぎの音は呼び声夕蛍
溶鉱炉の煙真つすぐ朝曇
少年のこころを今も鱗雲
涼新た第一句集のならぶ書架
決めかねる永代供養柿は朱に
湾奥は第二の故郷秋つばめ
白壁に蝶の貼りつく小春かな
炎立つごとし夕日の枯すすき
束ねたる賀状木端の音に落つ
切り絵めく富士山の影冬茜
想ひ出は消えず真冬の昼の月
春浅し香箱座りに猫眠る
蹴散らして行きし人あり霜柱
孫連れて来たる倅とおでん鍋
ディスプレイに浮ぶ指跡養花天
囀やかがやき初むる藪の木々